ランチョンセミナー（抄録）

小児感染症における経口カルバペネム薬の有用性と安全性

堀　誠治
東京慈恵会医科大学　感染制御科

はじめての経口カルバペネム薬 tebipenem pivoxil（TBPM-PI）が，臨床使用可能となっている．TBPM-PI は，tebipenem（TBPM）を活性本体としているが，その臨床試験は，PK-PD の考えに基づいて設計され，また，小児感染症に対する試験が先行して行われた．ここでは，TBPM の特徴を，有用性（抗菌活性・臨床試験における有効性）・安全性から見直すこととする．

TBPM は，小児における中耳炎･副鼻腔炎および肺炎の主な原因菌である肺炎球菌，インフルエンザ菌，モラクセラ・カタラーリスおよびメチシリン感受性黄色ブドウ球菌に対して強い抗菌力をしている．

PK-PD から見ると，TBPM はカルバペネム薬であるにも関わらず，AUC/MIC（Cmax/MIC）と治療効果との間に相関が認められている．小児中耳炎・副鼻腔炎・肺炎と対象とした臨床試験からは，AUCf/MIC ≧ 6 で細菌学的効果・臨床効果ともに 100％となっている．

一方，安全性に関しては，23.0％に副作用が認められたが，重篤なものは報告されなかった．下痢・軟便などの副作用が多く認められた（19.5％）が，脱水症状などは認められなかった．Pivoxil 基を有する化合物では血清カルニチンの低下が報告されている．TBPM-PI の投与により血清カルニチン濃度は，投与終了時には投与前値の約 50％に低下していたが，投与終了 7 ～ 14 日後には前値に回復していた．なお，カルバペネム薬で問題となっている痙攣は認められなかった．

このように強い抗菌活性と PK-PD 上の特徴を有する TBPM-PI を，耳鼻科感染症において適切に使用することが重要となる．耳鼻科領域感染症治療における TBPM-PI の位置づけについては，座長をお願いしている山中教授にお話をいただくこととした．

御参加いただいた先生方の診療のお役に立てば，幸いである．